

東京都知事指定伝統工芸品

江戸簾

は じ め に

この小冊子は、昭和56年度から実施している「東京都伝統工芸品産業振興対策要綱」の規定により、指定された伝統工芸品の申出書を収録したものであります。

この内容については、指定工芸品に携わる人達の基本的な知識、技術をまとめたものであり、重要な事項ばかりです。

文献等につきましては、指定申出時までに判明した資料を収録してあります。

さらに、伝統工芸品統一表示事業としての伝統マーク貼付のための「検査規程」を収録してありますので、活用いただきたいと思います。

1. 指定年月日 昭和58年3月10日

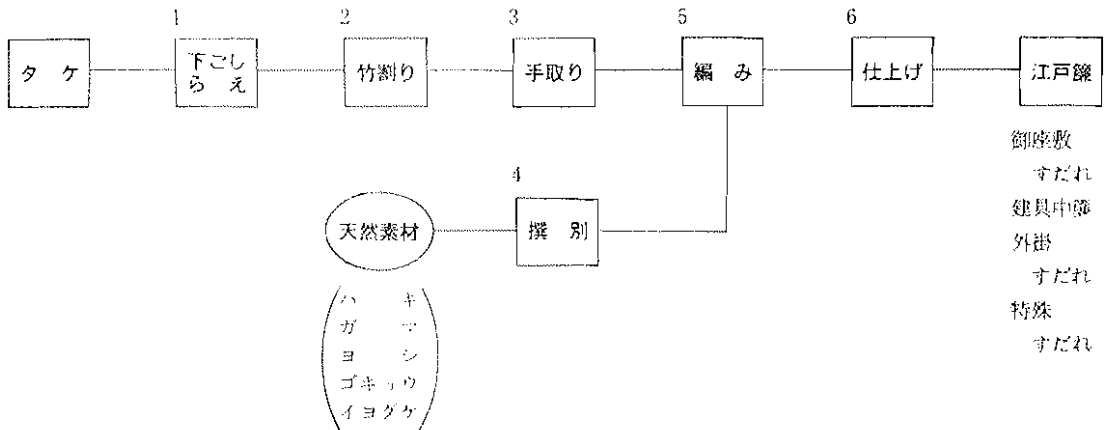
2. 工芸品名 「江戸簾」

3. 用 途

製 品 名	主 要 な 用 途
御 奉 簾	神社仏閣及び一般家庭の神棚用、芝居、歌舞伎の舞台装飾用
内 掛 す だ れ	御座敷すだれ、夏障子（簾戸又は葎戸、萩戸）、襖屏風、風炉先屏風、間仕切り用すだれ、花寄せ屏風
外 掛 す だ れ	軒掛用すだれ、茶席用すだれ、一般窓用すだれ、よしず（目隠し、日除け用）
特 殊 す だ れ 他	型抜きすだれ、装飾用すだれ、包装用すだれ、のり巻すだれ、セイロ用すだれ、乾燥用すだれ、伊達巻鳴門用

(注) 製品名とは、当該工芸品の製品で、上表には主要な製品について記入する。

4. 製造工程（代表的な工程）



番号	工程名	使用する道具・機械名	具体的作業の内容	手作業性の有無	主要工程	使用する伝統的技術又は技法
1	下ごしらえ	つるのこ (ノコギリ) かなな せん	竹を一定の長さで切り、もみぬか、砂、塩等でこすり水洗いをし、よごれを取る。特にふしの部分のよごれを取る。 又、一部はふしをかななでけずり、平らにする。 表皮をせんでむく場合もある。	○	○	○
2	竹 割 り	なた (日本月を 二つに切断した もの) 小月(厚刃・薄刃) ぶざし (分指)	なたで大割り及びへぎをする。 小月で小割り及びけずりをする。 目をひく。(割った後の竹の順序をくろわせないようにするため) 大割り→へぎ→小割り→けずり (一本の竹を二つに割る)→(皮と身にわける)→(こまかく割る)→(けずる)	○	○	○
3	手 取 り		竹ひこになった物を乾燥するために手取る。 (順番にそろえられる様に割った順に、けずった順にたばねる作業)	○	○	
4	選 別	選別台 選別わく	長さ、太さをそろえる。ウラ、モトをそろえる。皮ひけ、皮きず、虫くい、ねじれ、うらこけ、もとっぱりを取りのぞき、細い物、太い物、それぞれ7段階ぐらいにわける。 (ウラは材料の先端)をいう。 (モトは材料の根元)	○	○	○
5	編 み	編台 (けた、 前かけ) 投げ玉	竹ひこ、荻、がま、よし等をモト、ウラの順に一本ずつ編んでいく。材料の太さや用途に従い、投げ玉のおもさを変える。	○	○	○
6	仕 上 げ	大ばさみ さばさみ	編み上がったすだれの両端をそろえるために、大ばさみで切り上下に、さんをつける。 座敷簾等は、さらに布のへりを両方につける。 又、建具の中すは、小あなにあわせて切ってはりこむ。	○	○	○

- (注) 1 工程は、原材料からの作業順に記入し、番号、工程名は工程図の番号、工程名を記入する。
2 「使用する道具・機械名」は主要なものを記入し、特殊なものについては別紙により説明を付すこと。
3 「具体的作業の内容」は、各工程における作業の内容が明確となるよう具体的に記入する。
4 「手作業性の有無」「主要工程」は該当工程に、○印等で記入する。
5 「使用する伝統的技術又は技法」は様式5の番号を、使用する該当工程欄に記入のこと。

5. 製造技術又は技法

番号	技術又は技法の名称	技術又は技法の確立された年代	具 体 的 な 内 容
1	竹 削 り	江戸時代前期 (1690年代)	<p>竹は、木材のようにのこぎりで切るのではなく目に合わせて割って編かく、又、へいでうすくするので、幅や厚さを一定にするのには長い経験を要する。カゴを編むヒゴとちがいで、ウラ、モトの幅や長さが一定しないと、すだれ材の要となさない。</p> <p>用途に応じて竹の裏を三角にけずったり、かまぼこ形にしたり、又、そらないよう削りにする等特殊な削り方もあり、高度な技術を要する。</p>
2	撰 別	同 上	<p>すだれは、材料が一本ならびに編まれるので太さが平均していないと左右の長さがちがってくる。天然素材は、ウラ、モトがあるので、ウラ、中、モトの太さが平均する様に選別しなければ、美しいすだれは生まれない。</p> <p>熟練を要する。材料をおしがると良いすだれはできない。</p> <p>素材の産地により、硬さ、もろさ、やわらかさといろいろあり、又、よしなどは、日やけ部分と皮のかぶった部分とで自然の柄（模様）を編み出すこともあり、選別には長年の経験や、かんによる高度な技術を要する。</p>
3	編 み	同 上	<p>天然素材を編むため一本一本くせがあるので、つめてためたり、ウラ、モトをずらしたりして左右均等になる様に、又、ねじれたり、ゆるんだりしないように編むには、多年の経験が必要である。</p> <p>すだれを平らにあみ、又、片さがりしたり、たいこ型になったり、つづみ型にならないように又、糸をとばさないようにあむことが重要であり、高度な技術を要する。</p> <p>編み方には、コマがえし、松葉あみ、もじりあみ、組みあみ、分けあみ等がある。(別紙参照)</p>

(注) 1 「技術又は技法の確立された年代」は西暦で記入する。

2 「具体的な内容」は、技術又は技法の具体的な内容で特に伝統性・手工性が明確となるように記入する。

別紙 編みの技術

① 一本編み（普通編み）

一般的な編み方で一本一本そろえて編むごく普通の編み方。

② 二本編み（松葉編み）

編み糸を一本おきに編む。材料は二本 一緒に編むところから二本編みといい、早く編める。間があかないのでたわら、炭俵等と同じ編み方。日にかざして見ると松葉を重ねた様に見えるので松葉編みともいう。

③ もじり編み

編み糸を一本ずつ多くからげて間をあく様に編む。すけて見えるので夏障子の中簾によく用いる。華やかに見える洒落た編み方。

④ 組編み（分け編み）

編み糸を二本ずつ組み合わせて配置し、一本は右、一本は左と編み分ける、それ故、分け編みともいいますだれがゆがまず洒落て見え強度もある編み方。

⑤ 蛇腹編み

特に工業用すだれに用い、両端を二重に糸をかけて丈夫にする。のり巻すだれ、せいろすだれ、伊達巻、鳴門巻、すだれ等の両端に編む。

⑥ 亀甲編み

糸目が、亀甲の様に六角の形になる様な編み方。主に神前翠簾。

⑦ こまがえし（竹すだれの場合のみ）

幅の広いすだれや裏表の無い様に、又、そらない様にといい註文の時に、竹ヒゴを一本おきに表裏・表裏という様に編むやり方。

⑧ 模様編み

竹の節を利用して、ひょうたん形や丸のたれ、角のたれ等の形を模様に出す編み方。

(糸のかけ方)

イ ミス編み

二本ずつ、二本ずつと編み糸をよせて配置する。座敷すだれ、御翠簾等。

ロ マンベ

編み糸を、均等間隔にかける。一段すだれ。

6. 使用されている原材料

名 称	使用され始めた年代	主 要 産 地	使用している理由
タ ケ (竹)	江戸時代前期 (1690年代)	千葉・栃木 静岡・その他 国内各地	割ったり、けずったりするのに適し、節の間も長く、成長も早い。 やわらかみがあり美しい。
ヨ シ (藪)	〃	千葉・栃木 群馬・滋賀	発育がよく、多年性、毎年採取でき、加工しやすい。 軽く水切りも良く、日やけと皮のかぶった部分との色の差が、模様になる。
ハ ギ (萩)	〃	栃木・群馬 埼玉	日本人の好む、おもむきがあり、のびちみがなく、しぶきがあり、繊細な感じが夏障子に最適である。
ガ マ (蒲)	〃	千葉・茨城 栃木	素材の芯がキビガラ状のため、断熱効果があり変色しにくく、おちつきがある。
ゴ ギ ョ ウ (御形)	〃	千葉・栃木 群馬	蒲芯と同じに断熱効果があり、色つやが良い。 丈夫である。
イ ヨ ダ ケ (伊予竹)	明治初期 1880年頃	愛媛	色つやがよく、年月を経るとあめ色にかわって気品がある。丈夫である。 涼感があり、戸の中にも用いられる。

- (注) 1 「使用され始めた年代」は西暦で記入する。
 2 「主要産地」は現在使用している原材料の主要な産地を記入する。
 3 「使用している理由」は、工芸品の品質、もち味等の観点から当該材料を使用する必要性を記入する。

7. 産地の概況

地 域 (各区市町村単位)	企 業 数	従 事 者 数
台 東 区	2 (2)	7 (7)
千 代 田 区	2 (2)	6 (6)
港 区	3 (3)	6 (6)
墨 田 区	1 (1)	1 (1)
品 川 区	1 (1)	2 (2)
荒 川 区	2 (1)	2 (1)
北 区	1 (1)	1 (1)
大 田 区	1 (1)	2 (2)
中 央 区	2 (2)	4 (4)
江 戸 川 区	3 (1)	5 (2)
江 東 区	1 (1)	3 (3)
目 黒 区	1 (1)	1 (1)
合 計	20 (17)	40 (36)

(注) 組合員は () に内書きとして記入する。

(過去3ケ年)

年	企 業 数	従 事 者 数	生 産 額
55	23 企業	45 人	47,800 万円
56	21	43	43,800
57	20	40	46,800

8. 申出の理由

	事業名	内容	実施期間
○ 予定される 振興事業の概要	(1)後継者の確保育成研修	伝統工芸品としての価値の認識を広め、若い人々にもアピールする様な製品を開発して、後継者の確保につとめる。 又、各種研修会を開き、伝統技術を修得させる。	昭和58年度 ） 昭和62年度
	(2)技術技法の継承改善	生活の中に育まれてきた生活の知恵から生まれる伝統技術を継承し、又、講習会を開き、技術技法の公開をしたり、互の技術交換をする。	昭和58年度 ） 昭和62年度
	(3)需要開拓	若い人々にも生活の中で使用してもらう物を開拓し、グッドリビングショーや住宅関連事業にも参加し需要開拓する。 東京都伝統工芸品展、出品・実績。	昭和58年度 ） 昭和62年度
	(4)品質表示・消費者への情報	省エネの折柄、伝統的すだれの良さをPRし、又、使用方法等も（取扱や保存の方法等）解り易くする。	昭和58年度 ） 昭和62年度
	(5)その他 ①原材料の確保研究 ②作業環境の改善 ③共同購買等の共同事業 ④従事者の福利厚生	天然素材の産地開拓や産地見学を実施する。 天然素材などの共同購入を計画する。 防災やその他、現代建築法に合わせる様に努力する。 他業種とも交流をはかる。	昭和58年度 ） 昭和62年度
○ 振興事業計画作成のためのスケジュール等の計画	58年8月・9月 10月	面組合で理事会にはかり振興計画をたてる。 総会で振興計画を決定し、都知事に承認申請。	
○ その他の 申し出の理由		残り少ない伝統産業を保存するため助け合い、少しでも前向きの方角で積極的に振興事業の計画を立て、原材料の確保、新製品の開発をし、需要の喚起をはかる。	

9. その他参考となる事項

<p>○ 東京都等との当該工芸品に係る振興事業に関する接働状況等</p>	<p>① 57年 6月 伝産についての打合せ会 ② 57年 8月 伝産調査 ③ 57年 11月 伝産関係でふる里東京祭に出品・実演 ④ 58年 3月 第26回伝統工芸品展に出品・実演 ⑤ 58年 4月 伝産指定申請検討会 ⑥ 58年 6月</p>																																																				
<p>○ 申出に係る協同組合等の概要</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">区分</th> <th rowspan="2">構成員の合計</th> <th rowspan="2">構成員数</th> <th rowspan="2">構成員の産業者数</th> <th rowspan="2">事業の概要</th> <th colspan="2">収入税額</th> <th rowspan="2">その他参考となる事項</th> </tr> <tr> <th>法人</th> <th>個人</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">55 伝統工芸品</td> <td>16,300</td> <td></td> <td></td> <td rowspan="2">展示会の開催</td> <td>1,246,022</td> <td>29,095</td> <td rowspan="2">協同組合等 設立年月日 東京職工労働同組合 昭和32年2月21日</td> </tr> <tr> <td>全製品</td> <td>45,000</td> <td>20</td> <td>10</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td rowspan="2">56 伝統工芸品</td> <td>13,500</td> <td></td> <td></td> <td rowspan="2">各種研修会 中産組入札貸 共同購入</td> <td>1,351,944</td> <td>18,388</td> <td rowspan="2">東京労働連同組合 昭和32年12月20日 協同組合等事務 員数 2人</td> </tr> <tr> <td>全製品</td> <td>41,000</td> <td>18</td> <td>38</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td rowspan="2">57 伝統工芸品</td> <td>15,000</td> <td></td> <td></td> <td rowspan="2">共同購入</td> <td>553,171,199</td> <td>23,156</td> <td rowspan="2">その他</td> </tr> <tr> <td>全製品</td> <td>43,000</td> <td>17</td> <td>36</td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p>(注) 1 構成員数については、連合会の場合は、1家下の各産業者の構成員の合計を記入する</p>	区分	構成員の合計	構成員数	構成員の産業者数	事業の概要	収入税額		その他参考となる事項	法人	個人	55 伝統工芸品	16,300			展示会の開催	1,246,022	29,095	協同組合等 設立年月日 東京職工労働同組合 昭和32年2月21日	全製品	45,000	20	10			56 伝統工芸品	13,500			各種研修会 中産組入札貸 共同購入	1,351,944	18,388	東京労働連同組合 昭和32年12月20日 協同組合等事務 員数 2人	全製品	41,000	18	38			57 伝統工芸品	15,000			共同購入	553,171,199	23,156	その他	全製品	43,000	17	36		
区分	構成員の合計						構成員数	構成員の産業者数		事業の概要	収入税額		その他参考となる事項																																								
		法人	個人																																																		
55 伝統工芸品	16,300			展示会の開催	1,246,022	29,095	協同組合等 設立年月日 東京職工労働同組合 昭和32年2月21日																																														
	全製品	45,000	20		10																																																
56 伝統工芸品	13,500			各種研修会 中産組入札貸 共同購入	1,351,944	18,388	東京労働連同組合 昭和32年12月20日 協同組合等事務 員数 2人																																														
	全製品	41,000	18		38																																																
57 伝統工芸品	15,000			共同購入	553,171,199	23,156	その他																																														
	全製品	43,000	17		36																																																
<p>○ その他参考となるべき事項</p>	<p>江戸簾の歴史については、別紙江戸簾の歴史を参照。</p>																																																				

江戸簾の歴史と沿革

1. 御簾は平安の昔から

- (1) 簾は、室内のしきりや日よけなどに古くから使用されてきた。

平安時代（794～1192）の中頃、清少納言によってかかれた『枕草子』の中にも、次のような記載がみられ、宮廷生活の中に簾（この場合は^か御簾）が溶けこんでいることがわかる。

◎「雪のいと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃^{ゑんづつ}に火おこして、物語などしてあつまり候ふに、「少納言よ。香煙^{かえん}絳の雪はいかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。（後略）」

（以上『枕草子』第278段から）

- (2) また、鎌倉時代の簾で重要文化財に指定されている簾が神奈川県のお寺に保存されている。

「211 簾一張 神奈川県 称名寺蔵 縦78.7cm 横90cm 鎌倉時代の作」

（毎日新聞社刊『重要文化財26』工芸品Ⅲ 甲 類・古神宝類から）

2. 江戸でも300年の歴史

- (1) 簾は、古くから伊予簾が有名であるが、京都のものが最上級とされ、「禁裏翠簾師」といった高級品専門の職人もいた。

江戸においても、徳川家康の江戸開府（1590年）以来、江戸の繁栄につれて、江戸城、武家屋敷、神社仏閣あるいは商家へと簾が用いられるようになってきた。

江戸時代前期の元禄期（1688～1704）に相ついで発刊された、『人倫訓蒙図彙（1690）』、『江戸惣鹿子名所大全（1690）』、『諸国万買物調方記（1692）』などには、「本吉原 みすや徳方、京橋北一丁目 みすや市左衛門」という御簾師（屋）がいたことが記されており、当時既に簾専門の職人がいたことがわかる。

当時の簾づくりの絵をみると、簾を編む道具や編み方が、今日のそれと変わらず、当時の技術・技法及び道具が今日まで保存継承されてきていることもよくわかる。〔資料1 参照〕

- (2) 次に、外国人の眼に御簾がどのように映っていたかについて興味深い記録がある。〔資料2 参照〕

ドイツ人博物学者エンゲルベルト・ケンペルがオランダ商館長の随員として江戸へ参府し、将軍に拝礼したときの模様を記した中に御簾の記述がある。御簾ごしにみる将軍夫妻や、また、大奥女中たちが

オランダ人たちのぞきみる道具に御簾が役立っていることなどがかかれていて、1691年3月29日（元禄4年2月26日）、今から約300年前の拜礼の状況が現代によみがえってくる。

江戸城内にかけられた御簾は京都の伏見製とともに、江戸京橋のみすや市左衛門製のものもあったであろう。

- (3) 簾は将軍、大名、宮廷などの高貴なお方ばかりでなく、庶民の間にもひろがって、日除け用に多く用いられるようになった。

浮世絵黄金期の代表的絵師喜多川歌麿（1753～1806）の作品の中にも、「百花園涼み」「風俗三段娘」「簾ごし美人風」などに簾がしばしば登場している。

また、江戸時代後期の諸風俗を記した『守貞漫稿』には、「簾売り」の記述があり、江戸でも鋸をたずさえて、竹簾、葭簾すだれを売る商売が存在したことが知られる。〔資料3 参照〕

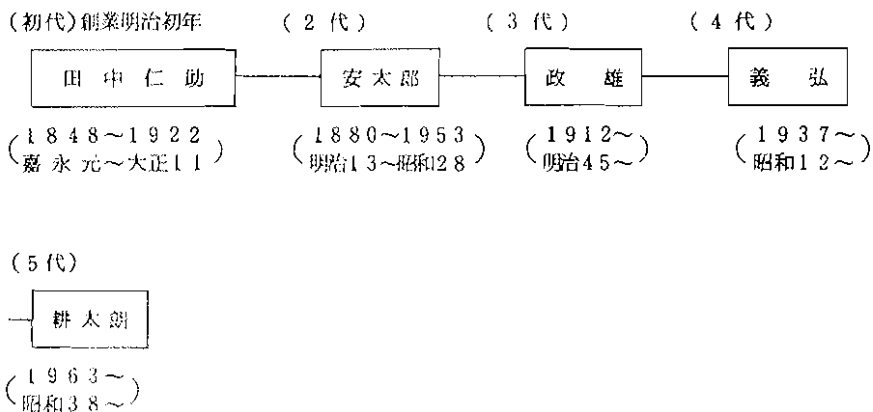
3. 受けつがれる手づくりの簾

- (1) 明治以降も、簾は、家庭や神社などにおいて使用されてきた。

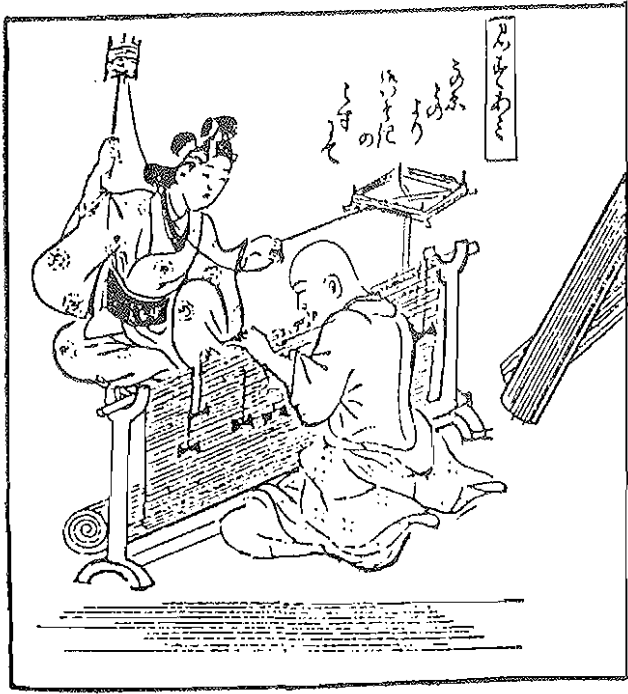
明治5年（1872年）発行の『東京府志料』には、府内各地で簾が生産されている状況が記されている。〔資料4 参照〕

近年、ビニール製のすだれや中国などの輸入品ものに押されて、手づくりの簾の需要は減少きみであるが、室内装飾品として見直されてくるなど新たな発展への契機が芽ばえてきつつある。東京の簾業界の規模は20企業、従事者40人と大きくはないが、江戸時代から継承されてきた技術を基礎に、現代の生活様式に合致したデザインと秀れた品質の製品をつくりだす努力を続けている。

- (2) 明治初期から今日まで、東京で簾を製作している業者を参考に記載する。



中列	翠	三味線	万角細工	あま
臨采	位牌	紙巻	漆	幌燭
刷毛	蓑	度蓋	足袋	二方物
月杓	南無	加納	のり	色紙
二町	九	賦	賣	札
杖法	万	芳	的	墨筆
扇	小	篋	楯	札
幡	合	福	鏡	墨
袴	右	約	練	白
秤	所	涼	度	蓋
			松	竹
			玉	細
			工	



『日本の職人』から転載



翠 織 屋 [七・室町後期]

『江戸の諸職風俗誌』から転載

増補江戸惣鹿子名所大全卷の五

南北江府中

一日本橋北通 南は日本橋より北へ白銀町土手まで又筋違橋まで

室町三丁 本町貳丁目三丁目よこ 十間棚 石町三丁通銀町通 乗物町 神田鍛冶町貳丁 鍋町 新

石町 すだ町貳丁 れんぢやく町

此町筋諸職賣物大概

萬ぬり物 墨筆 糸や 本屋 合羽屋 鏡や 扇子 佛具屋 切付や 經師 きれや けさ衣 印判
屋 琴屋 三味線や 萬角細工 水菓子屋 いはいや 紙屋 らふそくや はげや 籠や うるしや
唐笠屋

一日本橋南通 北は日本橋より南へ京橋南通四丁南傳馬町三丁

此町筋諸職賣物大概

表や 絹屋 かや 萬小間物 墨筆 靴屋 切付や 扇子 みすや 指物屋 紙屋 藥種や らふそ
くや 合羽や かぐみや あら物や つくらや かごや ふと物や ゑのぐや はげや 玉細工 秤

▲京ニテ御翠麩町

富小路夷川上ル 谷口和泉

鳥丸夷川上ル 徳助

同町 三右衛門

室町四條下ル 七右衛門

▲江戸ニテ御翠麩町

本吉原 みすや徳方

京橋北一丁目 同市左衛門

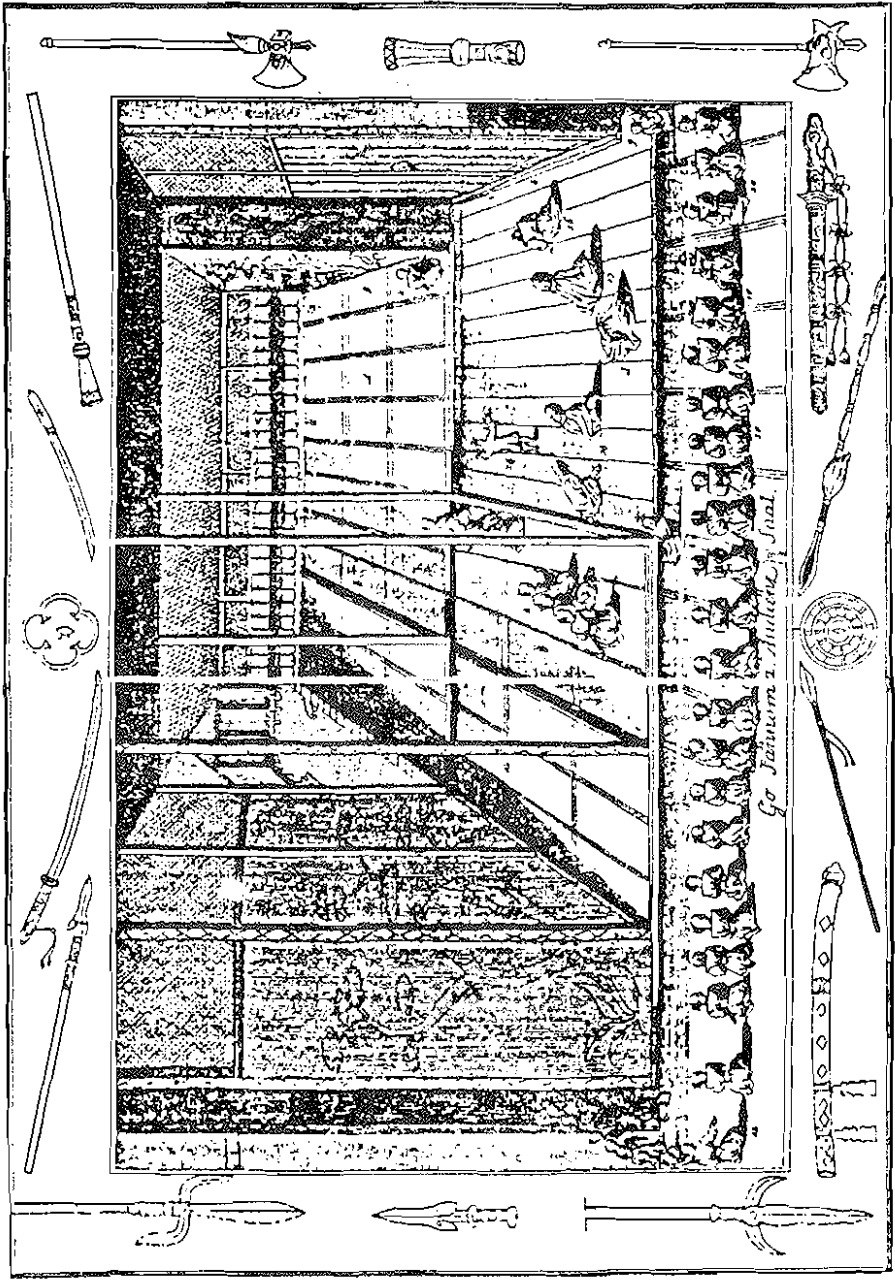
▲大坂ニテ御すや

天満ほり川

『人倫訓蒙図彙』

【翠麩町】唐土の楊竹氏といふ者車の物見にかけんために作れりと、日本にては崇神天皇の御代にあり。奈良ハナ師宮小路竹陰町下ル丁和泉、鳥丸竹屋町徳助、同三右衛門、民間に用る鑲品の麩は伏見にこれを造る。又伊興鑲京に上す也。江戸本吉原徳方、京橋一丁目市

『諸国方買物調方記』



第12図 御見の広間の内部

■ 牧野備後守の座所。 b 秘府高直の着座する場所。 c 諸役人
 が一列に坐っている廊下。 e 小石をしきつめた中庭。
 1 御簾（みす）。後ろには、二度目の拝謁の時、将軍や奥方やその一
 族がいた所。最初の拝謁の時には、彼らは 3. 4の後ろに坐っていた。
 2の後ろには延座たちがいた。 5 備後守の定位置。われわれが拝謁し
 た時には、彼らは将軍と馬士の都合のよい 6のところ坐った。
 7 老中。 8 若年寄。 9 若干の重臣の廊。 10 侍臣。 11 その
 他の高直。 12 一列に並んだ下様の幕臣。 13 オランダ使節コルネ
 リウス・ファン・アウトホルン。 14 将軍の命令で踊るケンペル。
 15 オランダ人書記。 16 通詞。
 なお本図の四隅に掲げたのは各種の日本の武器である。

れば十分で、老中から再び長崎に帰ることが許されたのである。しかし現在、つまりこの二〇年来は、僕等と一緒にやって来たオランダ人たちも、最初の拜謁の後で再び御殿のすつと奥に招き入れ、願望や見物の目的で、將軍の夫人や、そのために招かれていた一族の姫や、その他大奥の女たちの前に、連れ出すのである。その時、將軍は女たちと一緒に、殿の後ろに隠れていたが、老中や拜謁に陪席を命じられた他の高官は、異なる所に坐っていた。

そこで、カビタンが敬意を表して引下がりが、將軍が自分の部屋にもどってしまおうと、すぐにおわれわれ三人のオランダ人は呼び出され、カビタンと連れ立って幾つかの部屋を通り、美術的な彫刻を施し、きれいに金箔を敷いた廊下に入り、そこで一五分待って、またほかの廊下を巡って一つの広間に案内され、坐っているようにいわれた。幾人かの頭をまるめた廷臣(これは輔佐・医師、または膳および階段人(僧侶とは、いわゆる参主のことをいう))が、

すぐにおわれわれの前にやって来て、名前や年齢やその他ごまかしたことを尋ねた。しかし、その後問もなく前にある金箔を施した襖が閉められ、われわれは坊主たちや傍を歩く大名の殿中の人々から解放された(われわれが見物されることになっている部屋に重臣が到着するまで、半時間ほどここで待たされてから、幾つかの薄暗い廊下を巡って連れて行かれた。これらの廊下には、ひざまずいた將軍護衛の番人や役人たちが正装して、一列にきちんと並んで坐っていた。その一部はわれわれが紹介される舞台の所まで続いていた。しかし見取図で見られるその場所は、中央の場所に向って、あるいは開け放し、あるいは簾で区切られた部屋が続いている。部屋はどれもが一五畳の広さで、中にいる人の位階によって、一方の部屋は他方より片一枚の厚さだけ高くなっていた。いき述べた中央の部屋は、薄く漆を塗った板張りになっていて、畳は敷いていなかった。従って一部低く、われわれはそこに坐っているように

命じられた。われわれの所からそんなに離れていない右側の御殿の奥には、將軍が夫人と共に坐っていた。私共が御殿の命で少しばかり踊っていた間に、御殿が動いてきまなすき間から、私はその夫人の顔を二、三個見ただけであるが、ヨーロッパ人のような黒い顔をした、美しい髪がかった円みのある美しい顔立ちであった。また顔部から判断して、大きな体格と察せられ、年齢はおよそ三六歳ほどと思つた(左大臣の御殿の姫で当時四〇歳)。

御殿について一言すると、それは垂れ下がっている白隠して、慶の敷に表をきれいに割り、およそ一拵尺の間隔を置いて絹の紐が通してあり、装飾のためというよりは、むしろカムフラージュのためにいろいろな模様を施されている。特にそこに燈火がない時には、外からは御殿の後ろは何も見えない。それゆえ將軍がそこにおられることは、ただその言葉だけでわかつていたのである。そのうえ彼は、大へん小さい声で話さるので、全く彼に気づかないくらいであ

った。われわれの前方、畳で四枚ばかり離れた同じように御殿の後ろには、將軍一族の姫たち(突訳本には公子とあるが、それは明らかに誤りである)や、その他大奥の女性たちが招かれて集っていた。この御殿の合せ目やすき間には紙を挿し込んであり、桑々とのぞけるように、彼女たちは時々そこを開いた。私はこういう紙を三〇個以上も数えた。だから、それと同じくらいの人々のいることが想像される。いき述べた御殿の手前の、一つの特別な部屋の中の一段高くなった席に側後が坐っていたが、そこはわれわれの前方で、將軍の声がよく聞える所であった。左側の特別な部屋には、老中や若年寄が序列順に二列に並んで坐っていた。われわれの後ろの、前に述べたような廊下には、側衆やその他の高官が席についていた。將軍の部屋の入口の襖の前後には、大名の子供たちや小姓や坊主が重なり合つて、じつと見つめて坐っていた。われわれが見物される舞台の外観や状況については、これで十分であらう。さて私

篋賣 初夏以來三都ともに竹篋賣等を賣る其粉定

なし故に一夫を圖す又江戸には初夏以來葎戸を賣る

各必ず鋸を携へて

敷居に合せ賣る京

坂には葎戸賣無

之蓋江戸に葎戸と

云京坂には葎障子

と號く



三 葎

(資料4)

『東京府志料』による籐生産状況

町名	枚数	金額
本銀町四町目	420	150
元人工町	5,500	450
南嶺町	200	5333
金六町	4,000	300
本村水町三町目	700	23333
日吉町	250	25
松田町	500	180
鉄砲町	500	25
田所町	450	23
新村木町	1,400	550
坂本町	700	233
赤坂田町四町目	95	3290
湯島切通町	1,000	25
牛込水道町	250	75
神田仲町一町目	400	44
神田飯籠町二町目	2,300	325
田代町	200	25
神田栄町	400	140
深田眞賀二町目	500	54

昭和58年度東京都伝統工芸品産業振興対策指定予定業種

労働経済局商工部

工芸品名	申出組合名	企業数	主な集積地	従業者数	産出額等	業界の問題点
江戸 <small>マダカ</small> 産	① 東京藤工業協同組合 ② 東京製籠協同組合	20 組合員17 ① 5 ② 12	江戸川区 港区 台東区 千代田区 中央区	40 組合員35 ① 12 ② 24	百万円 468	1 ビニール製品や中国製などの輸入品との競合 2 良質な原材料の入手難 3 後継者の確保難
指 定 基 準 状 況						
製造工程の主要部分の手工業性		製造技術又は技法		使用されている原材料		産 地 の 概 況
製造工程は大きく ①材料づくりと②編みの2工程に分かれている。 ①の材料づくりの工程は、下こしらえ、竹割り、手取り、撥刺とがあり、また、 ②の編みの工程も種々の編み方があるが、いずれも主要部分は手作業にて行われている。		(技術技名の名称)(確立された年代) 江戸時代前期 1 竹割り (1690年代) 2 撥刺 3 編み		(名 称) (使用された年代) 江戸時代前期 1 タ ケ (1690年代) 2 マ シ 3 ハ キ 4 ガ マ 5 ゴギョウ 6 イヨタケ		(地域) (企業数)(従事者数) 江戸川区 3 5 港 区 3 6 台東区 2 7 千代田区 2 6 中央区 2 4 荒川区 2 2 その他 6 10 20 40

平成3年6月発行

江戸 簾

編集発行 (株) 田中製簾所
東京都台東区千束1-18-6
電話 03(3873)4653

印刷 株式会社 きょうせい
東京都新宿区西五軒町4-2

